

《観光・交流》

つ の ち ょ う
高知県津野町 「廃校舎が「森の巣箱」に生まれ変わる」



つ の ちょう

高知県津野町 「廃校舎が「森の巣箱」に生まれ変わる」

地区の住民全員が関わる廃校舎活用型の交流拠点

基本計画づくりから宿泊施設運営まで、
地域主体で成し遂げた宿泊型交流体験拠点

森と清流を有する自然の町、津野町の中心部からさらに山間部に入ったところにひっそりと佇む床鍋集落。過疎高齢化に悩む集落で、廃校校舎を活用して取り組まれている「森の巣箱」がいま、全国的に注目を集めている。

商店も飲み屋もない活気の失われた集落はこのままでは消滅してしまうのではないかと。若者たちの危機感が行政当局を動かし、地域のうねりにつながった。足掛け 15 年に及ぶ取り組みにより、床鍋集落は毎年 3,000 人が訪れる町の一大観光地として成長した。床鍋集落が「津野町で一番元



出典)津野町資料

気のよい集落」へと変貌を遂げるまでの関係者の苦労、そして思いとは ?

取り組み概要.....

取り組みの目的

生活利便施設がない床鍋集落の廃校校舎を改修・再活用することで、集落内外の交流拠点を創造する。

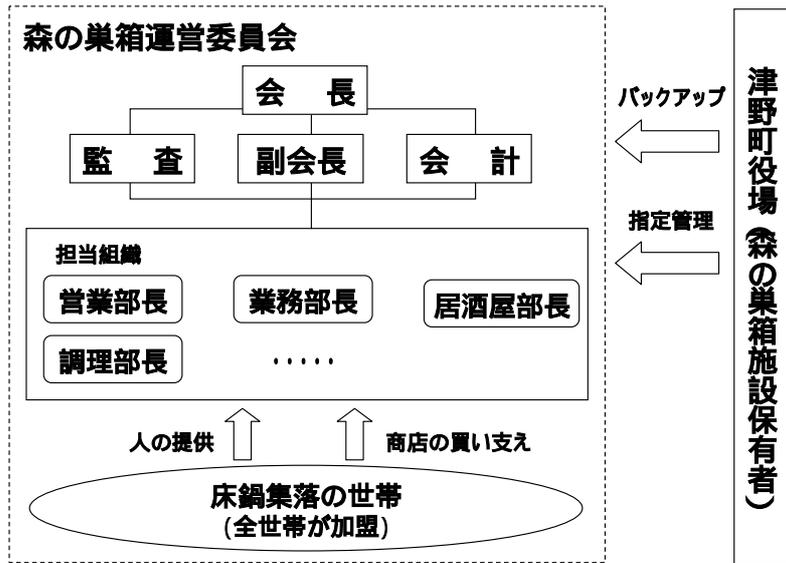
取り組みの内容

- ・「森の巣箱」における集落コンビニ、居酒屋などの生活利便施設の運営
- ・廃校校舎を活用した宿泊施設の整備、及びイベント開催などの観光客呼び込みの工夫

取り組み主体

- ・森の巣箱運営委員会
- ・津野町役場

取り組み体制



取り組みのポイント

1. 「自分たちの力」に対する気づき

取り組みを進めるうえで、いきなり高すぎるハードルを設定するのではなく、気軽に取り組みることから始め、小さな成功体験を積み重ねながら取り組みを進めた。また取り組みを支援する行政も小規模なソフト事業を継続的に確保し、適切な距離感を保ちながら活動が途絶えないようバックアップを続けた。

2. 「地域とのふれあい」によるリピーター獲得

宿泊客が食事をするスペースと、集落住民の居酒屋スペースを同じくすることで、「地域の人とのふれあい」を森の巣箱で体験できる。腰を落ち着けてゆっくり飲みながら生まれる交流の評判がよく、リピーター獲得の秘訣となっている。

3. 「住民全員がオーナー」地域の人に関わり続けるための工夫

商売が成り立ちにくい床鍋集落で取り組みを継続させるために、オープンに先立って議論を重ね「各世帯が森の巣箱で買い物をする」など、地域が買い支えすることを合意した。

取り組みによる成果

- ・交流人口の増加
- ・作業所の併設による集落の産業活性化
- ・総務大臣賞の受賞

今後の展望

- ・「廃校再生」のパイオニアとして、交流機能の更なる展開
- ・森の巣箱を「地域のサービス拠点」として再び位置づける。

津野町の概況

消滅の危機に瀕した林業の集落

津野町は、高知県中西部に位置する人口約6,800人の町であり2005年に葉山村と東津野村の2村が合併して生まれた。町面積の90%が山林に覆われ、四万十川の源流を有する自然にあふれた町である。

旧葉山村の新莊川では特別天然記念物のニホンカワウソが国内で最後に確認され、旧東津野村には四万十川が流れるなど、森と清流が町の最大の特徴である。今回紹介する床鍋集落は、旧葉山村の中心部から5kmほど離れた山間部の小さな集落である。かつて林業で栄え、1960年代には300人以上いた人口は、林業の斜陽化に伴って、現在約120人にまで落ち込み、現在では農林業を併せた兼業的な就業形態が主である。

床鍋集落の高齢化率は津野町平均よりも更に高く、平成7年国勢調査時点で40%を上回っている。極端な過疎・高齢化により、集落機能の維持すらも危ぶまれている。

歴史を伝える町

津野町に伝わる津野山古式神楽は、延喜13年(913年)藤原経高が京より津野山郷に來国したときに、神話を劇化したものを神楽として伝えたことが始まりとされている。

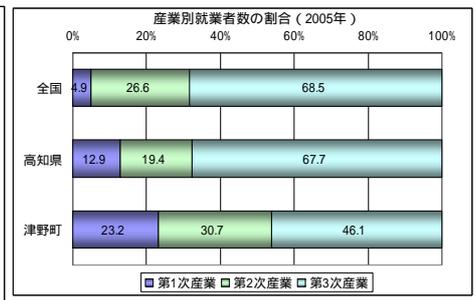
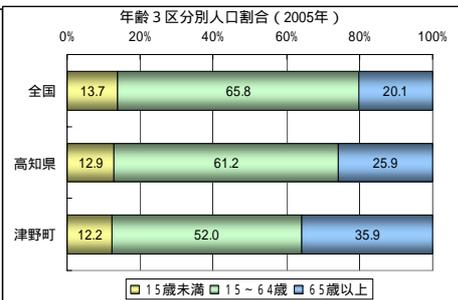
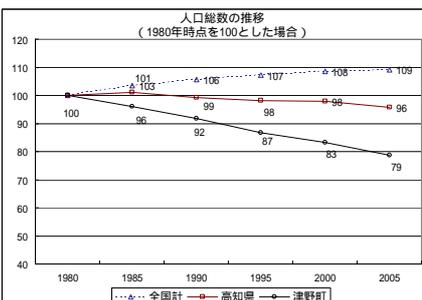
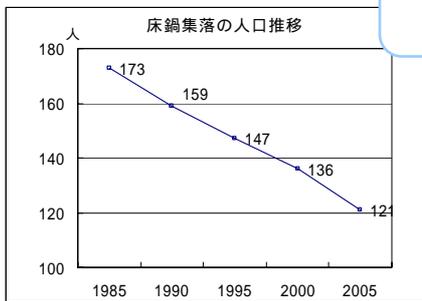
『宮入り』から『四天の舞』まで全部で17の舞がありすべての舞を舞い納めるには8時間ほどかかる。また鍋蓋上廻し式の高野の回り舞台は、国の重要有形民俗文化財の指定を受けている。

床鍋集落は山間部の集落という立地上の特性もあり、戦前や江戸時代に建設された古い寺社仏閣や蔵などの歴史的な遺産が良く残っている。

<津野町へのアクセス>
 東京から
 高知市まで飛行機で約2時間
 高知駅から特急とバスで約2時間
 大阪から
 高知市まで飛行機で約1時間半
 高知駅から特急とバスで約2時間



出典)津野町HP(2011/4/4参照)
<http://www.town.kochi-tsuno.lg.jp/access.html>



出典)総務省統計局;国勢調査

取り組みに至る経緯

集落消滅の危機感から始まった取り組み

「このままでは集落が消滅してしまう」。取り組みの発端は、大崎博文氏をはじめとする床鍋集落に住む 30～40 歳代の若者数名の抱いた危機感から始まる。

現在でこそトンネルが開通し、津野町の中心部とは自動車を使って 10 分程度で行き来できるようになったものの、取り組みが始まった当時は一旦隣接する須崎市を経由して迂回して片道 40 分の道のりをこえていくしか手段がなく、床鍋集落はまさに「陸の孤島」であった。旧葉山村のなかでも床鍋集落にのみゴミ収集車がこない、救急車や消防車が来るのにも数十分かかるなど、行政サービスの面でも大きな格差があった。

かつては日用雑貨を販売する商店や小学校が集落内部にあり、小さいながらもある程度自立した生活ができていたという。しかし唯一の学校であった床鍋小・中学校は 1983 年度に廃校になり、その後一軒だけあった商店も無くなったことにより、地域の活気は失われてしまった。人口減



山あいに位置する津野町では、棚田による稲作が盛んに行われている。後継者難に悩みながらも、地域活性化に向けた取り組みとして、蠟燭によるライトアップを行ったりしている集落もある。

少に加えて、大きな行政サービスの地域間格差は住民のあいだに『自分達は見捨てられている』といった不満感をもたらし、集落の存続すら危ぶまれた。

大崎博文氏は、危機感を同じくする床鍋中学校のOB仲間数人と集落の将来について真剣に話をするようになった。せめて今住んでいる人同士は和気あいあいとしていなくては。そうした思いが彼らを駆り立てた。

行政への働きかけによる取り組みの進展

とはいっても自分達で解決できることにはどうしても限りがある。集落の活性化のために行政も汗をかいてくれないか。1995 年に大崎博文氏ら村の面々は旧葉山村役場企画室の高橋正光氏（現在は津野町総務課長）のもとを訪れ、床鍋集落の現状を直訴した。「それまで特に床鍋集落に深く関わったことはありませんでしたが、行政サービスに大きな格差があることは知っていたので、行政の人間としてずっと疑問を抱いていました。大崎博文さんは集落では若手であり、役所の『実働部隊』である当時の私とも年齢が近かったから話しやすかったのかもしれない。自分も

今回紹介する床鍋集落の風景。「森の巣箱」の隣には清流が流れ、夏のシーズンには川遊びもできる。施設周辺には昔ながらの石垣が美しく残っている。一見するとすぐに崩れそうだが、水はけを考えた隙間の多い構造が合理的かつ特徴的だ。



かねてから問題意識を持っていた地区でしたし、課長からも背中を押されました。でもいきなり予算をつけて事業化することはできない。大崎博文さんには『まず自分たちで頑張ってみてください。役所もお手伝いはするけどそれ以上の約束はしませんよ』というしかありませんでした」

取り組みの主役は住民であり、行政はそれを影からサポートするという当初のスタンスは、取り組み開始時から現在に至るまで変わっていない。「徹底的な住民主体型」は「森の巣箱」の取り組みを考えるうえでのキーワードといえるだろう。

まず、できることから。

生活支障林の伐採活動の実施

集落の若者数名の思いから「集落の取り組み」への進化の第1歩は、集落と村の中心部を結ぶ県道に覆いかぶさっていた木々の伐採であった。

「せっかく自分たちが昔植えたのに」という反発を説得したり、沿道の土地の地権者を探し出したりという苦労はあったものの、集落を暗くして

いた木々に生活支障林と名前をつけて伐採し、数ヵ月後、見違えるように明るくなった道の眺めに人々は感動したという。集落の取り組みは新聞にも取り上げられ、しばらくは「明るくなったねえ」が毎日の出合いの挨拶となった。外部の人間がちょっと聞いただけでは地味に思える活動であるが、地域の人たちの「自分たちもやればできるんだ」という自信を高めるうえで大きな効果があった。また具体的に活動を行うことにより、徐々に取り組みに参加するメンバーが増えてきたのも大きな収穫であった。元JA職員でかつては集落で雑貨屋も営んでいた大崎登氏おおさきのぼる（現在は森の巣箱施設長）が取り組みに参加したのもこの頃である。

「それまでに皆で集まってボランティア活動をした経験なんかはありませんでしたが、小さい集落のことですから、呼びかけるとみんな進んで協力しました」と大崎登氏は当時を振り返る。床鍋集落発のこの取り組みは「環境林伐採事業」として、現在津野町全域に広がっている。

施設外観。施設再生にあたって外装材は全て取り替えたものの、元の校舎そのままの白木材仕上げとしている。構造材は学校として利用されていた頃のままだが、水にやられていた部分は、再生にあたって一部取り壊し、施設の規模を縮小している。



「森の巣箱」の名にたがわず、敷地内の木の枝にはたくさんの巣箱が括りつけられている。ただし、肝心の鳥は入ってきたり来なかったりだとか。校庭には、学校として使われていたころそのままにブランコやジャングルジムが残っており、施設を訪れる「元・小学生」たちの郷愁を誘う。

集落再生プランによる地域活性化イメージの共有

一部の人たちの熱い思いから、徐々に地域のうねりに変化しつつあった取り組みを絶やさず、新たな流れにつなげようと、集落の将来を考えるための集まりの場が持たれるようになった。役場側も高橋氏と、もう一人の女性職員が二人体制でバックアップにあたった。

一部の人の意見だけでなく、皆の意見を聞きながら話を進めるために、会合はワークショップ形式で進められた。途中で活動が停滞・中断してしまったりした時期もあるが、1995年から2003年の間にもたれた会合は100回を優に超えた。

最初の頃は「集落に福祉施設を整備してほしい」といった案が出る等、行政に対する要望の場になりがちであったが、会を重ねていくうちに、『自分たちでなんとかしないとイケない』という思いが強くなってきたという。

会議のなかでは、自然や歴史など床鍋集落の魅力について再確認するとともに、当たり前すぎて普段口に出さないが、生活するうえで困っていることが話題にのぼったという。「ちょっとした買い物をしたくても村の中心まで出て行かないといけない」「集落の中には酒を飲める場所も無い」。そうしたなかで、廃校になっていた校舎を集落の再活性化の拠点として活用しようという意識が盛り上がってきた。

1983年に廃校になって以来手入れもされず打ち捨てられていた校舎はガラスも割れ、ぼろぼろの状態だったため「本当に使えるのか」「壊してしまったほうがよいのではないか」といった意見も聞かれたものの、集落の皆が集まれる場所としての旧床鍋小・中学校に対する地域の思い入れは強く、なんとか再利用して使い続けようという結論に至った。こうして集落の有志をメンバーとする「床鍋とことん会」により、2001年3月には校舎の活用計画や地域の景観計画等の地域活性化方策を盛り込んだ「葉山村床鍋集落活性化プラン」が策定された。計画では廃校校舎を活用し、「コンビニ」「居酒屋」などの機能に加えて、「帰省客がちょっと滞在するのに便利なように」と、宿泊機能までを導入することが盛り込まれるなど、集落の住民と行政の協働で練り上げた大作に仕上がった。

Point ワークショップを進めるうえでの工夫

「とにかく恥ずかしがり」と高橋氏が表現する床鍋集落の人は、人前で自分の考えを発表する機会などなかったこともあり、活性化会議を始めた頃は参加者から話を引き出すこと自体が大変だったという。

「肩肘はらずに小難しい話抜きで」話し合いを進めるにあたって付箋に各人の考えや意見を書く際にも「漢字は極力使わないでひらがなで書く」など、できるだけ参加者をリラックスさせる工夫がされたという。「酒でも入れればみんな話し出すんですけどね」とは高橋氏の弁。

床鍋倉川夢トンネルの開通

地域の取り組みが続けられているのと平行して、旧葉山村役場では床鍋集落の活性化に向けた別のプロジェクトの検討が進められていた。村の中心部と床鍋集落をつなぐトンネルの計画である。交通の便の悪さという構造的な問題を抱える床鍋集落を元気にするには小手先の施策では不十分で『カンフル剤』が必要と判断した高橋氏と吉良史子村長（当時）が、国等へ必要性を訴え続けた結果、高知県の「ふるさと林道緊急整備事業」としてトンネルが整備されることになった。

「県も財政的に決して楽でないなか、人口が100人程度しかない床鍋集落のために全長1キロメートルのトンネルを通すというのだから、当時は議会でも紛糾しましたし、費用対効果について新聞等でも色々たたかれました。そうした中でも事業化にこぎつけられたのは『自分たちで地域活性化に取り組んでいる集落』だったことが大きい。地域の活動なくしては多分トンネルも実現しなかったでしょう」と高橋氏は振り返る。

トンネルの開通により地域の利便性は劇的に改善され、行政サービスも大きく向上した。集落皆の思いをかなえたトンネルは「床鍋倉川夢トンネル」として無事2003年3月に開通することになる。



床鍋倉川夢トンネルは2003年に開通した。落成式には集落の面々も集まり、トンネルの完成を皆で祝ったという。

「集落生協」として森の巣箱オープン

集落の人々が買い物をしたり、ちょっと飲みに来たりする場所として廃校舎を活用するアイデアは固まったものの、人口規模が100人程度の床鍋集落に外から事業者を連れてくることも現実的ではなく、施設運営も集落の人々で行う必要があった。

校舎の改修工事費用は行政が負担したものの、運営については集落住民に完全にバトンタッチされ、住民自らが商品の仕入れから販売、経営までを手がける「集落生協」という形で実現することになった。集落の住民全員が名を連ねる「森の巣箱運営委員会」によって念願の校舎再生が実現した。



森の巣箱は旧床鍋中学校を、ほぼそのままの形で利用している。建物の構造材である木材は年月が経っても表面を削ればきれいになった。施設の機能・プランニングも集落の中で議論して決めた自信作である。

出典)津野町資料



森の巣箱施設長

おおさきのぼる
大崎 登 氏



「森の巣箱」の施設長を務める大崎氏は元JA職員であるほか、かつては集落で雑貨屋を営んでいた。「廃校舎活用のパイオニア」として、全国各地から訪れる視察の対応や講演をこなす毎日。彼の講演がきっかけで「森の巣箱」を訪れる者も多い。

「森の巣箱で集落が明るくなりました」

Q. 「森の巣箱」の取り組みで集落がどう変わりましたか？

取り組みが始まる前とはだいぶ雰囲気が変わって、格段に明るくなりました。正直言ってもう昔の集落には戻りたくないです。かつては床鍋集落は「陸の孤島」って言われて、他所の人からは「こんなところで生活していても駄目だから出て行きなさい」とまで言われたことがあります。しかし今では床鍋集落が津野町で一番元気な地域って言われるようになって、自分達もやればできるんだと実感しています。

Q. 「廃校舎再生」のパイオニアとして一言お願いします。

旧床鍋中学校は、廃校になってからずっと捨て置かれていてワークショップの時も取り壊した方がいいという意見も出ましたが、「あってよかった」と今では思っています。ここは何も無い地域だと皆思っていたけど「学校」というのは、地域資源として観光に十分活かしていけることをこれから伝えていきたいと思うんです。

床鍋集落に来る方たちは、どこかの山や川を見に来るのではなく、「森の巣箱」をめぐって来るんですもんね。最初はターゲットとして帰省客を見込んでいたこともあって、宿泊費が安すぎるような気もしていますが（笑）

旧床鍋中学校の竣工記念のプレートには「講和記念建築」と書かれている。サンフランシスコ講和条約と時を同じくして建てられた床鍋中学校は一見ただの木造建築であるが、廊下の天井の凝ったつくり、当時の大工のこだわりが感じられる。



森の巣箱の内外には学校時代の名残として、かつての生徒達が作ったオブジェや絵画が残されている。数十年前の在校生の卒業制作の絵には、製作者のサインが今でも残る。ゴーギャンを連想させるタッチといったらほめすぎか。

Point ネーミングの妙

「森の巣箱」という絶妙なネーミングセンス自体が本事例の特徴のひとつといえる。当初は、旧葉山村の鳥の名前から「やまがら」という案が有力だったが「やまがらだと、人が出て行って、空になったような過疎の象徴のような感じがする」ため、代わりにワークショップで出た「床鍋中学校は鳥の巣箱みたいな形じゃないか」という意見を膨らませ「外に出て行った人、巣立った人が帰ってくる」というイメージで、響きのいい「森の巣箱」でいこうという話にまとまったという。

現在の取り組み

マスメディアの注目による好調な滑り出し

森の巣箱がオープンした 2001 年は、ちょうど全国で田舎暮らしやグリーンツーリズムがブームになっていた時期であった。森の巣箱も「廃校を拠点にした集落再生の取り組み」として旅行雑誌に取り上げられたことがきっかけで、オープンと同時に団体旅行客やクラブ活動の合宿客などの観光客が押しかけることになる。外部からも一定程度来訪者があるとしても、宿泊客の多くは盆暮れの帰省客だろうと見込んでいた森の巣箱には想定外のスタートであった。



「集落の人はホタルに興味を示さないから勝手がわからなくて」と大崎氏が振り返ったホタル祭りはいまや森の巣箱の一大イベントである。神楽の団体が練習の成果を披露するなど、他の集落との交流の場にもなっている。

「ホタル祭り」を始めとする外部とのコミュニケーション機会の創出

思わぬ盛況に後押しされた結果として、森の巣箱は「集落住民と外の人との交流拠点」としての性格を強めることになる。

現在森の巣箱で行われている交流イベントとしては「ホタル祭り」が代表的である。昼間はホタルに関しての勉強会や地元有志によるコンサート、津野山古式神楽が披露される。夕方から夜にかけては郷土料理を味わった後にホタルの見られるスポットまでそぞろ歩きを楽しむ。

集落の人にとっては初夏のシーズンにホタルがみられることは珍しくも無いことだったが、たまたま森の巣箱を訪れた環境問題の専門家から薦められて始めたところ、現在では毎年約 1,500 人が訪れる森の巣箱の目玉イベントとなった。ホタルの時期には日本全国から来客があり、中には毎年のように足を運びリピーターも少なくないという。リピーター客の中には、ここで結婚式を挙げるカップルもあり、これまでに 2 組が式を挙げた。どちらも元々集落に縁のない県外客だという。



森の巣箱を訪れたカップルの話を大崎氏が聞き込んでいるうちに、ここで結婚式を挙げるようになったケースもある。その後の夫妻は継続的に森の巣箱を訪れるリピーターとなっている。

出典)津野町資料

取り組みのポイント

「自分たちの力」に対する気づき

現在でこそ経営も軌道に乗り、「成功事例」として紹介されるまでになったものの、集落の面々にもともと経営のスキル・ノウハウがあったわけではない。

「最初の一步」を踏み出すまでに、いきなり高すぎるハードルを設定するのではなく、放置されていた林の伐採など、割と気軽に取り組みることから始め、小さな成功体験を積み重ねたことが成功のポイントといえる。また、「地域が主体」といいながらも、集落に全てを丸投げするのではなく、地域の計画づくりを「コーディネート」という立場で県の補助金を確保し、活動が途絶えないようにバックアップした旧葉山村役場の役割も大きい。

「集落の将来を考えるワークショップを行うなかでも、『街灯の整備』など、規模の小さい事業を入れながら、少しずつでも前に進んでいる実感を持ちながら進めるようにしてきました。そう

しないと疲れてしまってなかなか続きませんからね」と、高橋氏は語る。地域の活動を後押しする行政のこの絶妙な距離感も森の巣箱が成功した要因のひとつといえるだろう。

「地域とのふれあい」によるリピーター獲得

オープン時にマスメディアに紹介されたことは森の巣箱にとって大きな幸運だったが、もの珍しさから客がくるだけでなく、継続的なリピーターを獲得できている原因のひとつは、「地域の人とのふれあい」を森の巣箱で体験できることにつける。宿泊客が食事をする1階の居酒屋スペースでは集落の人も毎日のように飲みに来る場でもあり、腰を落ち着けてゆっくり飲みながら交流が生まれる。「地元の人たちも一緒に話しながら飲むのを一番喜んでくれる。なんだかんだいって何もない集落なので、小奇麗な宿泊施設があるだけでは、なかなか二度三度と来てくれるようにはならないでしょう」と大崎登氏は話す。

「集落コンビニ」では洗剤、タワシなどの日用品やカップ麺などの他に、肉や野菜などの生鮮食料品を扱う。日常生活に必要なものは一通り買い揃えることができる。集落の人の好みも大体分かっているので品揃えにムダがないとか。



「集落コンビニ」の一角に設けられた居酒屋スペース。夜になると集落の人たちでにぎわう。つまみが欲しくなったら棚からヒョイと商品を取ってきてテーブルに並べるのが森の巣箱流である。

出典)津野町資料

「住民全員がオーナー」地域の人に関わり続けるための工夫

かつてよりは交通の便がよくなったとはいえ、やはり町の中心部から離れている床鍋集落で商売を行うにあたっては、どうしても輸送コストが上乘せされる分、商品が割高になってしまう。

集落の全世帯がオーナーとして関わっている以上、赤字を出して事業を失敗させるわけにはいかない。



かつての講堂は現在ちょっとした講演や会議が行われる際のスペースとして活用されている。また、森の巣箱には25人しか寝泊りできないため、学校のクラブ活動などで多数の来客がある際の就寝スペースとしても重宝しているという。

商売が成り立ちにくい土地柄ゆえ、オープンに先立って議論を重ね「各世帯が森の巣箱で買い物をする」といった買い支えで、赤字が出るのを防いでいるという。「中心部のお店で買えば95円で買えるものも、森の巣箱では100円になるかもしれない。でも100円で買ったうちの25円は集落のもうけになるんだぞ」といって最初に皆を説得しました」と高橋氏は力説する。

森の巣箱の客室は一見すると普通の旅館の寝室とそう変わりないようだが、かつての教室の部屋割りをほぼそのままいかに作られている。一般教室、理科室、宿直室など、もとの部屋の用途によって少しづつ広さが異なっている。各部屋にはそれぞれ特徴的な名前がつけられている。



津野町役場総務課長
たかはし まさみつ
高橋 正光 氏



旧葉山村時代から取り組みに関わった高橋氏は100回に及ぶワークショップに出席するなど地域と共に取り組みを進めながら、トンネル開通に向け奔走するなど、陰に日向に支援を続けてきた隠れたキーパーソンだ。「森の巣箱関連のことは異動した後でも自分にお鉢が回ってくる」と苦笑する。

『再生は可能』と確信していました」

Q. 地域の取り組みを支援するうえで気をつけられていたことは？

最初に話を持ってこられたときは「どうしよう」という思いもありましたが、なんとか役場を動かそうとやってきました。集落に入っていくときも、地域柄、「酒でももってこい」といわれることもありましたが、それだけだと取り組みが進まないのでも「酒が飲みたいだけなら明日からはもう来ません」ときつめに言ったこともありました。

それと、取り組みを進めるうえで「先進事例の視察」には一度も行かないようにしました。方向性が固まる前に先進事例を視察すると、考える力をそいでしまうし、自分たちの地域の実情を忘れてしまうと思うんですよ。

Q. 全国的にも事例の少ない木造校舎の再生にあたって苦労されたことは？

森の巣箱に先立って、古い酒蔵の再生を手がけたこともあり、個人的には「再生は可能」と確信していました。でも見た目がぼろぼろだから、最初のうちは地域の人々もできるとは思っていなかったようですね。あと耐用年数がとっくに過ぎている木造建築ですから予算を確保するときに高知県と交渉するのがなかなか大変でしたね。

取り組みの成果

交流人口の増加

オープン以来、入り込み客は順調な推移を示している。現在では集落の人口の30倍にあたる約3,000人が毎年床鍋集落を訪れている。

外の人々が頻りに訪れる場所になった結果、床鍋集落の雰囲気も明るくなってきているという。「集落のなかに飲食・集会スペースが整備された」という事実以上に住民に自信を与えている。昔は『寂れているから床鍋でなくて底鍋だ』など口さがないことをいわれたこともあったというが、いまはその面影はない。

作業所の併設による集落の産業活性化

森の巣箱の取り組みの一環として、隣接する集会所にししとうのパック詰めを行う作業所が併設されており、地域の高齢者に働く場所を提供している。

作業所を誘致した大崎登氏が「地域におちる金額としてはたいしたことないけど、実は作業所の開設が一番地域のためになっているんじゃないかと思っている」と語るとおり、産業らしい産業がない集落に「高齢者の居場所」ができたことは明るい雰囲気づくりに一役買っているといえる。

総務大臣賞の受賞

森の巣箱の取り組みは、2007年度全国過疎地域自立活性化優良事例を受賞した。

行政の力をかりず住民自らの手で運営が行われていること、単なる宿泊施設ではなく住民の生活を支えるライフラインとして機能していることが評価されたという。

今後の展望

全国の「廃校活用」のパイオニアとして

全国的に少子化が進み、市町村合併が行われるなか、廃校になる小中学校は増加している。森の巣箱はそうした取り組みのパイオニアとしての自覚を持ちながら取り組みを進めている。農業体験、エコツアーなど、さまざまなアイデアが関係者からは出されているところだ。

Point 大崎登氏によるトップセールス

全ての集客施設でプロモーションは成功の可否を決める重要な要素であるが、森の巣箱は小さな組織ゆえに大々的な宣伝をうったり、大量にパンフレットを刷ったりすることは困難である。ここではお金をかけて宣伝活動を行うのではなく、定期的にイベントを実施することでマスメディアに継続的に紹介されるよう工夫している。また「成功事例の紹介」として、精力的に外に対して講演を行い、情報発信をしてくれる大崎登氏の存在は施設のプロモーションを考えるうえで重要な要素である。

再び「地域のサービス拠点」として

県外からの観光客を集め、「成功事例」として全国の注目を浴びた森の巣箱であるが、運営委員会のメンバーは「集落住民のための施設」という当初のコンセプトを再認識する必要があると考えている。オープンから8年が経過して、先述した「買い支え」の仕組みが地域で忘れられつつあるのも事実であり、森の巣箱を「地域全体の取り組み」として位置づけようとしている。

取り組みにより交流人口は増加したが、過疎高齢化の流れがストップしたわけではない。2008年から、地域で暮らす一人暮らしの高齢者のために森の巣箱を拠点にした配食サービス車が津野町によって配備された。今後は森の巣箱を見守りサービスの拠点として活用していこうという意見も出されているという。ただの観光地として売り出すのではなく、当初からの思いを大事にしながら、森の巣箱の取り組みは続く。



森の巣箱運営委員会
おおさきさとこ
大崎智子 氏



大崎智子氏は「森の巣箱」の常勤職員として宿泊客の受付から食事の支度、洗濯までを切り盛りしている。普段は、パートと合わせて3名体制だが、忙しいときは集落全体から応援が駆けつける。

「皆が協力してくれるから続けています」

Q. 「森の巣箱」を運営されるなかで苦労された点は？

オープンした当初はどのくらいお客さんが来るか全く見えないまま働いていました。自分は昔商店で働いていたこともあって、レジ打ちなどは問題なくできたのですが、宿泊客の食事には相当気をつかいました。合宿に来る子どもなんかだと人数は多くても好みが変わりやすいから気が楽だけど、大人はお酒も飲むし、やっぱり「田舎のもの」を一品出さないと満足してもらえないので難しいですね。高知だからお魚もおいしいし、このあたりだと「ツガニ」という川で取れる蟹の味噌汁が名物になります。集落の人には地元で作られた豆腐の評判がいいですけど。

Q. 集落の方の取り組みへの参加の仕方は？

やっぱり、「地域」がやるんだから意味のある取り組みだと思っています。普段は3名くらいで施設を切り盛りしていますが、集落の皆にも電話して協力してもらっています。お年寄りなら朝、若い人なら夜でも大丈夫とか考えながら頼むようにしています。最初「都合が悪い」と言われてもなんだかんだで来てくれたりするので助かっています。

あと、地元の人が外から来たお客さんと夜一緒に話して飲んでくれるというのがいいですね。皆さんそこに一番喜んでくださいます。おかげで毎日片付けの時間が遅くなってしまっていますが。